様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７７０１７３

研究課題名（和文）近代日本における基本漢字文献の基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study of the Books about Common Chinese Characters in Modern Japan.

研究代表者
岡墻　裕剛（OKAGAKI, Hirotaka）

常葉大学・教育学部・講師

研究者番号：３０５６８３４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治時代に刊行され後の日本の基本漢字集合の成立に影響を与えたチェンバレン(1899)『文字のしるべ』と近代以降の日本の国内外の漢字文献を比較し、次の2点に言及した。
1.2000～3000字程度の基本的な漢字集合には、日本人の伝統的な解釈に基づくものと、西洋人が日本語習得のために作成したものという2系統が存在する。そして、その両者が相互に影響しながら合流した結果、現在の集合となった。
2.現存する『文字のしるべ』に残る使用形跡から，当時の所有者が用いた様々な漢字習得の方法が明らかになるとともに，その実用性が証明された。

研究成果の概要（英文）：In this study, comparing the books about Chinese Characters published in Japan or foreign countries and Chamberlain (1899) A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing, that affected the common Chinese Character set later, next two point was proved.
1. There are two big stream about 2000-3000 common Chinese Characters set. One is based on the traditional interpretation of the Japanese, the other is created by Westerners, who was studying the Japanese. As a result, while affecting each other, both of them merged together, and become current sets.
2. From the using evidence that remains in Chamberlain (1899) now existing, we can learn about various methods of of how the owner used this book, and understand practical value of this book.

研究分野：日本語学

キーワード：文字　表記　漢字　国字問題　漢字集合

１．研究開始当初の背景

言語学的な見地からは，文字言語は音声言語に準じる副次的なものと見なされる傾向があるが，漢字が日本語の発展に果たしてきた役割は大きい。特定の漢字について原義や出自や誤用例などの研究は一般書でさえ広く行われる一方で，数千字単位の漢字を一つの集合体として捉えて分析した研究はあまり例を見ず，我々が「基本的な漢字」ととらえる規範性もつ漢字の集合体の出自や変遷の過程は未だ不明瞭である。

集合体としての漢字の例としては，日常的に使用する漢字の目安である「常用漢字表」があげられるが，2010 年の改定では国民をも巻き込んだ議論にまで発展したことは記憶に新しい。他にも,「表外漢字字体表」(2000 年)の制定,「人名用漢字」の大幅な追加(2004 年)といった国の施策や, 常用漢字についても定期的な見直しが予定されている。また，PC や携帯電話などの情報機器の急速な普及にともない，情報処理の面からも集合体としての漢字の研究価値は高まっている。このような二つの観点から，我々が日常生活の中で使用する漢字群についてその起源と変遷の動態を解明することは，今後も継続的に変動する日本人の漢字使用の在り方を考える上で重要な課題であると言える。

近年の漢字を取り巻く研究環境をみると，『明朝体活字字形一覧』(文化庁文化部国語課, 1999 年)において大幅な漢字活字のヴァリエーションが整理され提示されたのを皮切りに，研究用のデータベースが次々に作成・公開されてきた。例えば,「拓本文字データベース」(京都大学人文科学研究所),「木簡データベース」(奈良文化財研究所)などがあり，岡墻が協力を行う「漢字字体規範データベース(HNG)」(http://joao-roiz.jp/HNG/)もその一つである。基本的な漢字群の通時的変遷を追う上では，個別の漢字についての情報を容易かつ大量に得られる環境が整うことが前提であり，これらの大規模データベースの構築は，研究推進上で重要な契機となった。

岡墻のこれまでの研究では，日本の言語学･国語学の成立に多大な影響を与えた B.H. チェンバレンの『文字のしるべ』(1899)を中心資料として，公的・私的の 2 種類の漢字文献との比較を通し，それぞれの資料の特徴とともに基本的な漢字の集合の変遷をたどった。具体的な研究の手法としては，基本漢字のデータベースを構築し実証的な調査・考察を行い,『文字のしるべ』がその後の基本漢字を取り扱う文献の成立や内容にインパクトを与えたことを明かにした。また，現存する同書 29 冊における書き込みの様態を調査し，漢字学習の実態を明らかにするという当時の日本語学習者の漢字取得プロセスについても言及した。これらの研究は，岡墻裕剛編著『B.H.チェンバレン『文字のしるべ』影印・研究』(勉誠出版，2008 年)として出版しており，日本近代における漢字普及度の実態や，国語教育史の研究において従来になかった視点を提示したと各方面で評価を受けた。

上記によって『文字のしるべ』以降の基本漢字文献の系譜についてある程度の理解を得られたので，今後は『文字のしるべ』と同時代，あるいはそれ以前の漢字文献を重視し，基本漢字の集合の起源についての遡及調査を進めることを志した。

２．研究の目的

本研究は，主に近代以降の日本内外の漢字文献を調査し，次の 2 点の証明を目指す。

①現在の日本における 2000～3000 字の基本的な漢字群には，伝統的国学に基づくものと，西洋人が日本語習得のために作成したものという 2 系統が存在し，その両者が相互に影響しながら合流した結果，現在の集合体となったことを明らかにする。

②基本漢字の集合の起源と変遷の動態を詳述することで，近代日本の国語施策・国字問題上でこれらの漢字文献が果たした役割と意義についての再解釈を行う。また，漢字文献に残存する使用形跡から，当時の日本語学習者の漢字使用の実態を明らかにする。

３．研究の方法

基本漢字文献の本文記述を調査するとともに，包含する漢字集合の特徴から参考資料とした文献を推定する。それに基づき，国内外に存在する現存本を可能な限り多く収集し，その内容を精査して仮説を立証する。

具体的には，チェンバレンが『文字のしるべ』の参考資料として使用した 7 種の漢字文献の調査に重点を置き，それぞれの文献の性質と収録する漢字群の規模・内容・傾向などを整理し，類似性・関係性を明らかにすることを目差し，まずは特に影響関係が強いと予測された Lay(1895) *Chinese Characters for the Use of Students of Japanese Language* との比較を行った。

また，両書に見られる書き込みなどの細かな使用形跡も意識的に収集し，それぞれの現存本の具体的な使用実態を証明した。

さらに，文献の全ページスキャンや，個々の漢字情報や画像データ化を行い，近代日本における基本漢字群の総合的な変遷過程を解明する基礎資料としてオンラインで公開を行う。

４．研究成果

(1) 現存本の調査

『文字のしるべ』の現存本について，日本全国の全ての大学図書館のサイトでオンラインによる蔵書検索を実施し，これまでに把握していなかった十数冊の現存本の存在を明らかにした。これらの諸本について，現地での調査ならびに ILL による取り寄せ調査

を行うとともに，平行して海外の古書店が所有する現存本の存在にも着目し，国内から購入可能な現存本の入手を試みた。また，ILL では確認できないような研究機関以外の図書館類にも調査に赴いた。

その結果，合計十冊の現存本について，当時の所有者の使用形跡の有無を確認することができた。例えば，横浜開港資料館では戦中戦後に日本で活躍したポール・C・ブルームの旧蔵本を発見し，そこに外国人名とともにアメリカで活躍した作家である「杉本鉞子」の名前を確認した。外国人から日本人へ，さらに再び外国人へと受け継がれたという動きが確認できる。ほとんどの現存本に書き込みが見つかったことで，当時の外国人による日本語学習において本書の有効性・実用性の高さを証明することに繋がった。

(2) 他の文献との比較

その他チェンバレンの著作についても調査を行い，使用形跡の量的・質的差異に注目すると，『文字のしるべ』では書き言葉の入門書という文献の特徴が色濃く表れていることが分かった。本研究の目的である当時の日本語学習者の漢字使用の実態の解明に寄与する調査結果である。

(3) 参考文献の特定

チェンバレンが『文字のしるべ』を作成時に使用した参考資料の特定をめざし，同書の序論の謝辞にある 7 人の外国人について経歴や著作の情報を整理した。その中でも特に，Lay(1895)*Chinese Characters for the use of students of the Japanese language* が『文字のしるべ』と日本の漢字集合を結びつける鍵となる文献であることが分かったため，両書の比較を行いその共通点と相違点をまとめた。また，新たに郵便報知新聞の「三千字字引」(1887)との関連性が明らかとなったため，三者を対照することで，それぞれの使用目的・作成意図に基づく異同が見られたが，他の漢字集合に比べて収録する漢字の共通性が高いことが分かり，下図 1 のような漢字集合の系譜ともいうべき関係性の存在が明らかとなった。

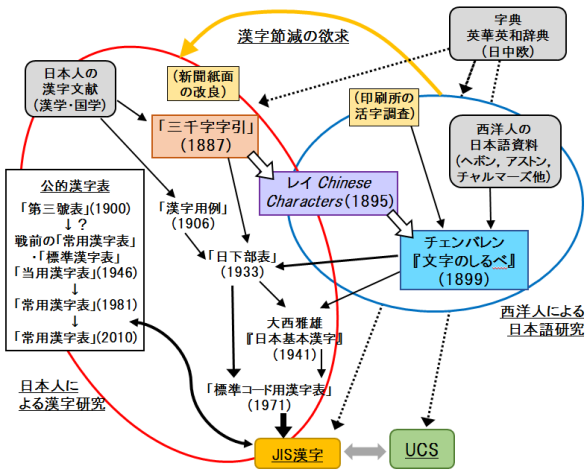
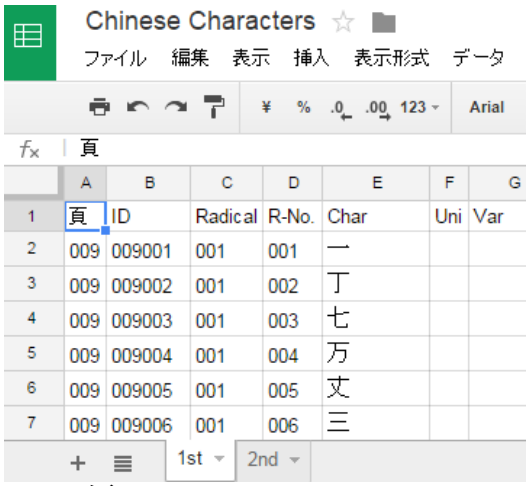


図 1　漢字集合の系譜

(4) データの公開

上記で使用した *Chinese Characters* の画像データと字種に関するデータベースを次 URL(https://sites.google.com/site/jishudb)で公開した。(図 2・3 参照)



頁	ID	Radical	R-No.	Char	Uni	Var
009	009001	001	001	一		
009	009002	001	002	丁		
009	009003	001	003	七		
009	009004	001	004	万		
009	009005	001	005	丈		
009	009006	001	006	三		

図 2　Chinese Characters DB

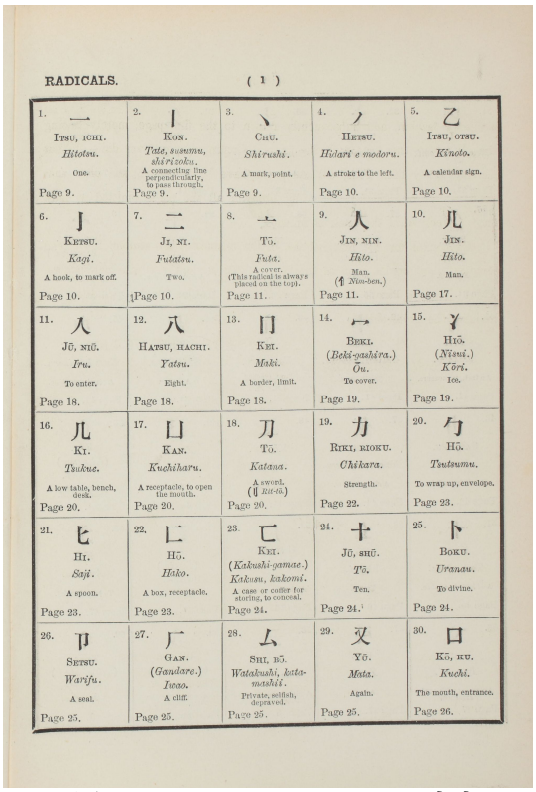


図 3　Chinese Characters の本文

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

①<u>岡墻裕剛</u>，近代日本における基本漢字集合の系譜 ― 『文字のしるべ』・Chinese Characters・「三千字字引」を中心に―，漢字文化研究，第 5 号，2015，pp.57-84，査読

有り,
http://www.kanken.or.jp/project/data/investigation_incentive_award_2014_okagaki.pdf

〔学会発表〕（計　1 件）
①岡墻裕剛,『文字のしるべ』と Chinese Characters の関係から見る漢字集合の系譜, 日本語学会 2015 年度秋季大会, 北海道大学, 2014

〔図書〕（計　2 件）
①小野芳彦, 池田証寿, 加藤重広, 佐藤知己, 高橋英光, 高田智和, 岡墻裕剛他, 情報科学と言語科学(仮), 北海道大学出版会, 2015(出版予定)

②Matthew ZISK, Mark IRWIN, ASAHI Yoshiyuki, OGAWA Shunsuke, ISHIZUKA Harumichi, INUI Yoshihiko, NARUMI Shin'ichi, SAWAMURA Miyuki, KUROKI Kunihiko, NAKANISHI Taro, KOBAYASHI Takashi, OKAGAKI Hirotaka, Frank DAULTON, UTSUMI Yumiko, MORI Yota, YAMAGUCHI Toshiko, YAMAMOTO Shingo, OKI Kazuo, Japanese Sociohistorical Linguistics, Mouton de Gruyter, Berlin. 2015(出版予定)

〔その他〕
ホームページ等
①https://sites.google.com/site/jishudb

６．研究組織
(1)研究代表者
岡墻　裕剛（OKAGAKI, Hirotaka）
常葉大学教育学部・講師
研究者番号：30568340

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：